# 釈迦八相物語

に

へ13
624
4

# 釈迦八相物語第五目録


一　王宮にかへりつき給ふ事

二　太子修行をし給ふ事

三　般若清基加羅仙人に逢給ふ事

四　雪山におもむき給ふ事

五　浄飯大王へ告ありて太子を迎に来る事

六　宮殿への尊そて奇特たえなさる事

巻之一　八相物語巻之

浄飯王よりさいつぎ給ふ事

迦毘羅城乃ほとりにだいこくの主乃ましましけるが

その御名をばたまはりにかくれなき御事なりされば

みかどをとゞめしたてまつり月日をかさね給ふ善覚

長者乃おんむすめ摩耶夫人をきさきにそなへ新ろう

にまた鹿野瞿陀耶輸陀羅女そのほかあまた

侍女ありしかども御こゝろにかなふことはさらになかりけり

されば釈迦仏いまだまします時をまんじてさとりを

ひらき給ひしぞかしそのかみ浄飯王のたいしにておはし

まし入道しやうくんとやまのうちにこもり給ひみちの

ためにはいかゞとおぼしめされけるとぞきこえし

ことハ光じまかりして姫いざおり侍る[illegible]今さらに
んとき[illegible]じけんみなをとうりこひさうしと紀にて給
がおひさ乃にきさいきてとも、かしぎに押ありれそ后
人[illegible]桐人とめしあり[illegible]くさう池しかに一人の[illegible]さ
なが桐せしむまの[illegible]にして[illegible]生乃[illegible]付も世あり
ありきさいふしこの[illegible]光あり。それに丸もなく
きいつ何もしれ[illegible]宮をはうつくしして後よふけまわ
もごとをす[illegible]乃まに[illegible]ものも[illegible]たる[illegible]
[illegible]代るべしとおひとのり押すひへうちそくひ[illegible]を
まれまでそてつさりつるに[illegible]ゝやのいしともや[illegible]く
[illegible]りよ礼儀とじしるを[illegible]ありとくんぞくへさ[illegible]や
[illegible]ごゝの[illegible]ちのくしる。[illegible]かりしくして[illegible]

それぞ名まゐりけるなまゐらく舞子なりく[illegible]
御息所やとおひくよしぞさてしにこ[illegible]は[illegible]
なへさそとも女御更衣そどうへかへとも大臣
ほこそけりやとなくさそふなかくてもうらそくことわ
りでしと[illegible]ろくせんぜさまれくてもづ新宮の人々
と[illegible]まへまかんさいつゝ右手はつくちまうしまいらせ
かく〇くの[illegible]にゐまは[illegible]とうち[illegible]をあり[illegible]らそも[illegible]
あしとも[illegible]よしとわかはやしおけなとせんしあらみなへ
[illegible]たまゐりさん[illegible]〇くよは[illegible]ともなぞ[illegible]
まいれ[illegible]うそりも[illegible]しまさ[illegible]うへその[illegible]
しは[illegible]たら[illegible]乃[illegible]まそ[illegible]やらか[illegible]
さりごしらさ[illegible]しめしみなくつ[illegible]〇まへ[illegible]こさしの

せんじやうりくしやうにはきよりしゆ人は行ことしくはよ人のまゐるは
夜の中には城しやかたへ皆よりはやるべしとこれ
一どうにまいらうりんのわかれはなごりをしくて物
やしかけて母は姫君へしおり為まで外中におけると
せんじやうさまりしやうぞく若御前へ母はさきのひろの
君のおりさは人への御中のごくずさしもり
ひりはりばは人へとしとあはりかみはにさまさく都やえん
其のこころのふしぎ乃ねがひさまにさかうるふ富ぎん
りきは行はりはかしいとりこれんにありしよみもとの扇ら
下とおこまんへとそともはわしてたてこひつ志のひくを
こえしりよたいけのりん乃は前して御ぜん人へ志ちやう
夢に人への志かくは見んもまうばはかのくとのよりり



御前座を乃おもくしよざこそはんでたる御かたはつろしを
ましわしじよふみれねはくよふうてりつらしまくも
それをとけし給ひてもろつひりなくふうちすぎてやり
わかりとらてけるやうふ見とまへでじ見やぞえいつぜ
御しくてあまよくは車でもとぞあわるんにまへつきやう
きるふくのくへ母をこといかの御じきごいかんのやさ
しあれにとうの車のくこしよう色おしくじまうかへ
いぶりゑりして若子人にら扇たなりすぞしばとのねがひ
とぜんぞさハすぐふれさもるとそ寝ぱ、つとつきされ
ま、扇をやたく母りて花こしまんにいそへおよくて世
たなふ今ぞいよりて我たまふひついて梅も君のつもりれ
時おりるとのこ児とのうさんに御けしやう身のたりしに打ちつたて

いつまでとまちまいらせ候ひしきこしめしけさきやあるまじ。
けんりやうによく御いのりくて御ぎやうのたすけともなるべけ
てかうきんありしみせんじりて御身ハ高き御にて
なまりはらひるときたりしハまことにありがたきことな
かりしこと給ひ給ひとかうまへてありつるにハ又こ
そうへりありぬべしとすんであまりしゆまうしそづ
きこ海の御ござさま神とかざりのたいめんしそこん
外とふらきたりひとまてふかりやしとれう給ひ給ふ
またの御所をあさこうそおふくて御をたのみう。
今りかうりしゆげけきせんしまかうて御ぜん修かり
しゆまりあん。

三　太子修行かさん事

それからも太子ハあらら仙人をたづねましまして
壇とくせんにわけいりたまひ。仙人太子をちかづけたまひ。
修行の作法をいろ〳〵とをしへたまふ。これそれにてあるぞ修行の志
これりてぞこころかずべしとちかひの家ありて修
ことは一念とこそあらはれたる太子のあまりたれ
まのつかれしさ仙家の作法をかなしきの袖よ海
さりさふあしころころてもそしよ縁こそいふべし見
たまふ乱しおりつさかなしけまりあり。御へあらはれ
ろうやうハされハ太子やけりつぞ太子にこころての
さまつて悪事くや仙とここへあまへて仙人ハ仙道の
法として父母のつけさはいふをそばよそれこれ
ありぬまでは瞿曇沙弥とよぶ庵をきまり。太子修行を

ゆくさきをとゞめて坐禅のゆかにはいりて仙術には
を修するに、仙経をよくしらずは法戒・禅定戒・三聚
無為戒・不生三昧戒・六根清浄戒、此五戒の仙の
まなり。これをかうは別行にして一戒より十戒あり。そ
の十戒より百戒あり。又五百戒あり、又二千五百
戒あり。これを名づけて自律戒・経律戒・持律戒と
まうす。三種持戒の仙法と号す。一切衆生はいまだ
ざりぬまでは、無慚破戒と号して、かゝる戒
ありたもつべしくとはじ。先づ聊爾なる座ぞく
ありてこゝの教ひ弟子ありさて仙法とていまだ
まさ人のこのゝばまさにひとりじといふ。これは八仙の
くわん念じてあり、一日によろこびてまくべし

志免乃をたまはず。太子さはよしさまし先しよりくるに
まゐりたまひて、さりしやふ太子は仙人のまなこ
と勇かみのくひぞろひの前にそゞろをたまひ、苦しみ
あくこたまひつ。ば甚よりせ給ふへば仙人は偏へじてい
やくぼんしやうあくとひとへず、酒ありのやうとふ
たむろ理ありあかくえて来りけるぞ、その業を
つひよはちからのみぢかからん。ひたすらくでんしやうにいりあく
このまゝへたゞ太子さきこしめされてくしとどろぐ。先
みしあればなげきてと見てくはれあと云ひけるあとを見
てはあかしく来り。あふみのをとりはさまへぞらく
まいりしてこそ人ぞ仙人はあさましやくでんしや
こゝろよこゝろのたましゐあり。やまさに誓語

太子仙人にたいめんの所

よそおゐつゝとうりし。つけの御のりのちゝとなる
経しゆのにてわかり。とこ三乗中よつゝかことりこゝ
弟りして金剛輪し一乗輪拾の輪山三昧をぬ
よかてこさひむしよびてわゞつくんとりて死そ滅
ありしやのおゝもゝられとつて梵文のあゝを行む
こし陽性陰徳現成とそのゝ性命あつてしあり。
如来三まい雑乗三摩正乗三昧として三昧輪を
わうしつゝんを志り死そてつむぞよこれ教命の
こゝやうおりおしあるくもむさわりそ。五悪しやうん
よくにつむてしおんぢが母乃いあちのあ。如世様かの
たまひかくぞゝらし海ものとしあさましさにや
なお彼戒のい海しめされあり志やふらんなりつゝ

そのぞてつてさりしや太子の頂上(ちやうじやう)よりちやうりくとお
たまふてごぞまうれにうしそゝうゝかうさりてことおう
ばしれ、あしわうかのとうちのやり、大地よ妙なる金
まへハざせんのふちんて呂しててつゝくよふまし紙
うけしよや、ごや、最勝(さいしやう)おうだつふおちりつ、日本の六
時のごんぎやうとうし光りて、志つくを行んども思てさま
ひとく一念(いちねん)三千(さんぜん)の起海無量中本来不滅白石個字
これんおうそざれしくうりにうらんらいせうぜうしてくだるとおどとを
とどめんにうなまうひ、あやとひのかうみくたうの白
象(ざう)ときさよせんおゝのかりそ、もとおゝて光ぜんを
いふれ、なとんしやゝぜんぎりくしめさまつて、ふしぎ
ありだ太子ハ御光のさめくさをしくりそ ありさる

たまへて、仙人ゆ飛んじして生れかりて此しまんかこの
つくめいうよはよりくかまり、勝金(さいこん)両相(りやうぶ)のくずくあれよ
まだなりいふしく、ごさん三やとしうかんとく、三十二相(さうがう)八十(びく)
ぐうふきさなりといふめく志あしなまくたんふしぎなり
太子はほうえとうけとりてたりちやまへいたらち纪よ
身よりひかりとのかく車(しや)をばまゐひかりのさうひかく王宮(わうぐう)
のやうこしもあるつ大きき庭(しやみ)一昧(まい)れこたらんにはしめ
まふをありがさし、又かうてかれの法にそ光まはいつぶせさい
ちぐをふうみし、そねよのかひをおもひつ、法末(ほうまつ)のえぶを
こりおくは肩(かた)をうけさせてまうひ、あまりだつよろこりあえ
ば仙人これをけ飛んでていりやまよりやうふ、山てに宮林の
まもりまわり、山林とされをとつよ、西の林、思惑林(さうやうりん)、雪齋(せつさい)

神じや鬼魔の事これもさながら宿の子なり。万事(?)
を拝として、国土ともろもろのしんぐにも衆生しやうれいしや
ま地獄のくるしみのほとけを作しらへて、ゑんま王の手をとりを
かくしたなり。無明の杖をおろしてみなさへりとも山まで授け
をなぞへぐく出のすくをくんなみんなが母なりけるも
かこ、そこまんしてみやさまと、まふまいらく、ともりと
ことさら、せかいしやうくいいくでをなさし浄土へといふよ程
えいりておもちかくもうちてこまへでいてこりしや大子は思
たえむしやうごあり。たまふは仙人は縁んじて勝金剛の
御身にて天にも浄土やうじく肉外しやうへくさんくさ
浄無をもある。おのづから勝寿をつくさせ給ひて、
極開天の身やくぼほののあたへを所く。先ず菩薩

力通照耀は立せんぎつくしてま菩提しきまま
あかくさしく大子たちは能ならす事あれば仰せの
兜のふかく仙人とれしたまへで仙人は縁で
て陀仏くくまれるうつまさり、陀力えんぜんちおもて
そばうをよけつえゆづつあるし浄無きとさよりまへ
あれかくしく大子はくつえたまわりくたりらさいきへでて
あんじやうらう通をひさまへつてらう無る事なくは、すいわ
ひかりのてらりすきばたりと照耀は立浄土の仏とも
ますはやけのほまでありあらかつてし仙亦おもく家へ
うり見とそげら仙人の見すれにて生彼の床のさんと
つるまるはひんかむとそま仙はかまさとさとかしとさ十
歳より千歳ハ二百より千歳より百歳二十より百歳二十ヶの歳御奉

と一戒もおやまりたまうハ三悪道を観じたまへて
仏家の蓮花をねがひ入り給ふ為本意をかゝりしく
あめたらしめまみの業をうくる蓮の糸をもて作るを
くどくをつくしたまひてけり。わが修行仙人よ二事ノおて
餌とはにこまゆも威儀をとハゆ也

三 縁覚の法に善からし仙人よ舎道縁ふ事ノ

それ方々わが修く仙人ハ迦葉比丘と申されたいには
比丘に為たまへば男三とせの修行りして又諸の羅を
きょうしてみ道のとくもえ仏くありさそ又母の事に
あんも因縁さてりくわくの生く隨縁とくたり給ふ
なりふ上妻の仙母としむまう統帝尺天乃ゆらにして
此当来作佛の授記とまうらく一佛浄土の縁



ふくきしんくじしく結縁と修志りハ此山のと参
宮乃室とはどんゆやおくあいしもとあかりが結
ら仙人の行とむひきまふりて為也も仙人ハ不怠ひ
て修ひとりんくたまへそぞんゆやりるあつきハ等
あふはりくさやなまハそんはやおりたりまへゆくてぞから
仙人第面ありく照善法丘とハ修ノ男がこしうぶ訶
たつくとまうじゆのれがえノあ大しれハあらんハ三宝輪伽
乃をあごやうわり殺窟縁窟信浄とけり然宮示
の法もりそて釈ヘ當代後とある修行太のおめ
なりて照善とぞのこゝもひろある大子ささこしめさ
れくさんぞはけのそめお身命とおもしきうれ師孝よ
命をかうぞ母てし家うぞとも行しりく仏と礼拝香縁

しなきひとかたのさはり照善にくて張羅すんぐらう
つもと照善仙人ふりこそとも仙人いと申する
なりたる因ぐやうの術をまなびし因位果位三昧
とてさん世不可得のもんなり。富貴をもてる涅槃をなる
菩薩なるしとらしてさぐるをもとのゆゑすり三明尊
八不家要をなりぬ。法の法位は変相をなりぬ寂をとる
結紀せしむるは法羅をなりぬ三徳之細軟のもんなり三
これらの法の修別しを不可説不可思の人の縁をなれ行
のさぶくらくなり。魔をこ玉葉樹といふ所すなりて
このくと本種子とくるとするとに一日に一つぶづつ日中
よ食するなれ。然ともおさゆるしてゐるしばを寶なる
わり。天門のみなそびえたるは波をおきやぬせんとし

丈人稀なりし山路をわけ入り所に勝(しようち)地は樹木(じゆもく)しげり
こけ深くして大きなる池あり。そこに金銅の宝(ほう)塔(たう)あり
石(せき)あり。これを坐禅(ざぜん)の床(ゆか)として、先づ一百日は籠(こも)りて
一唯(ゆい)一百日は仙居のざぜん、一百日は外(よそ)にてのざぜん
行(ぎやう)のうちにはいなかめぐりし、行のうちにも念(ねん)じ行(ぎやう)の
うちにあひぬ。これ仙人のこゝろなりけり。自然(しぜん)の行
相(さう)なりけることもあやまりてもおもしろし。天人は御ゆるしあるを
うけよ。これを見て直(ぢき)につゝしむべし。仙家の法(ほう)をさとられな
かくて荒(あら)の左布(さい)をぬすみて、その光ゆるされなくぞ
ありとこそ、それそのうへてるとも、幸子は妙舎利(しやり)仙人となりし
て三宝の行(ぎやう)へ入たまひ、宝の日かずとしも、せ九代済度(ど)
まことおもはしくおほきれ。御身はいかで千年のごとくにてましまさ

こゝろのほかにあり妻の日ながれゆきてとゞめたまひけ
わしとのべたまへば、意趣(いしゆ)ていひざをとくこたまへば、林の日
かくてしかじかと申せばたちかへり、わが勤行(ごんぎやう)をこなたの済(す)まし
まかりおりし光の来りしくさをもひざうと袖とりて孫
たまひて、びうびう凛々(りんりん)とぞござんなれとて、やう〳〵におきあ
がりけりありさまをつゝみたまへば、ひつぎのとこに睡眠(すいめん)
ありつらんぐつくへ光こそ童子(どうじ)二人来りてとゞまる
へあやしのそれ〳〵にわがちかれいとかんじて心
を仙洞(せんどう)の法花(くわ)を見まし、ひざせんのゆくへにあが
つらしぐ。寺院の称ふつつにとゞまて、衣(ご)にやかろにみて
さうぞくは織物(しよくもつ)して、きらびしくよそほひ、仙家(けかう)のごんざくくる
なくさいそれいまし見えまふしてはいてさりしやうかた

黒縄乃縛りいましめ先そだたりの苦患よりくるしめ
あぐれでいきをたえくるしむところをバすこしよろこび今
受するもに世尊のつよきりやきえくしゆ務あるぞ
行をなし善れ仏まみりしそれつきられハ苦をつくし
て仏のきへと慚愧をもうしとてわがめんぐまでほどこし
親もくるゝ無人みうの声回りかいかうしかんさまりなく
そうりのれとんをよ稀んまるしなるまへ天帝子は
トしそ所し成大するや声回りあハ海しての仙人りそお
まけるそやうのいまし先れたりとそしたは坐禅の座ま
まことせ座しこをまくらそそあよわげくうやうひさ
人へだかみつ手しもやうくれ石しもまくへハ毒子ハ空とにわが
いまくまいたし気もくかんでざりぐるる有難やまさそまぐ

ふもとよりのほりしにそれすなはちかのくちさし
三重がわひさしこうして仙人のはらへ給ひけり
同 富山よりとくむきたまへり
かの仙人まうでと見えされはいつもかの金剛ざう王権
かうさいの密教よとしてかどやうおもせられ
まします富山　乃毘沙門天王愛染明王薬師如来
二人の仙人とたのもしくおほひとこそ仏を給ふ下堂
ハ法相宗錫杖大乃まにおたまへこれ如意輪
薩三摩耶杖たのまふすらこまりひせりきんの家
とうふいさま、当寺より念仏法華すべきたる
あるとし　ぬさまいひろまえそあるとぞこれがくつしろのかね
りいのち仙人のまへひれりさうるやは男の因縁
秘めさひとくしてぞ山上の二種の法ぐんぐんけり
金剛のはおもうしも山つ秘密云こんしもとり、此
ふしくそふひと海しかきまりそこぶめ中の二修
びまり、二ぞ乃つらん二しめの法を功徳とかうさう是を
なし、まつやおこんがう杖とつ上ハ錫の魔を払のおそれ
とれ、思惑をとくとかうふつゑをもちゐて浄土とい杖
八相天乃まもるとかくたりて不浄をさらすく云。
法楽寛陽杖ハ文殊仁王の功徳あり法華以
奪られもちし此三摩耶護摩名このまうし神力自
在ありたりてこくりしいぶやうのりくおくれるとこ所を
も富士山上八山頂の宮殿を乞房舎道はつえとか
きうしてさうらふつまりにまうしぬさまいくさく法華云と申しかへる

ゑつこりし座主子八寺。とゑの先のこよ侭しんでたしら
行のつれ行て御身此らくこ花しろへてだいにこゝろ
乃あく陰縁陰難の石碑をゑをとすごし給ふ
そおわれなりつきみりけるに岩乃かどをかこみし
瑠璃色の岩りかたよみつら出しそてもさいえんやがしこり
たすまし給しまたまひ花さわくるへとこらつしもみる
ゆとらやらとみんこまのかむるのも
又　浄飯大王へ告わり太子を御迎よ参しまし
ちよひ行内悩しごあるに龍の魔るかといふもの
じあんさ由と見まつらせかむくしやうよ乗りつくさ
まよたけりやしねむひて天女と参りて御門の浄飯
大王に告くしと申て告けるにば王ハよ悉乃伽ゆ

見んどし天らわこれ行し先は悉達太子ハはくし
だんどく山をこえりつ難行六年の苦行をぎやうしと
て又雪山へゆかんとて大船をたちよしつゝ山中をまて
給ふが檀特山とふ原よ着りよりまてありまま
うびのこまくるのこありさありわれさなとる
ころがさけもやうかうをれいにば門このこしこし
見し先をあつれこ悔しくてひくらよ天乃つけるぞ
やされらく車たてこよそてどびひとれ座せんしお家
第大臣きあし先しこそあけたりるさ甲車うがお
国の中をとつたりもえくひせとまでひく勅使をと
づくもなをとしてなようかしとおさりま
そく見ましまへハみかどもえいぶんまりしておかくこれ

をいられけるまゝれく　よろしくとうだなだめすかし参らせ
参らすれども　しおんたらきうくまうしとつさ光のみ宮中
ふつきまいらぬよりしも女子てんごとよろくはうかゞ
ゐたも人まいりて　にほひ川　ば　はしめし
くつらくとしのせんじまて侍従殿ハやるおはせ
そらし瞻門寺よりそきゞけるこゝろとしふかかり心を
つきにはのごかしことをうらしにとおもひ岩のしづら
げよへかと思れゆへすも此しごとはつかせハさう
うれくうれしまひしれおもて海がんのもにかくに
御門とかく中くやそらけるじうだいはそぞにくしよ
まそこれハいつるまいまいりおもてござしとうに
よけるはゐもくしる此宮のそらだたるさるも

北の方を御門わましくしやうてふつくしやう宰相はいさき
のかよりせたまひそいきたりしあまさん
どもきくじきさぎやかくげんはわさらされ御国に
ひとの世たまふひつうだぬぐわかと御縁しけるあるか
たるまへくびごとくかされをいりても富山の御けめ
みえ人をこころそいぞげしつてむかふつひとうにちかう
御かりきたりみれなもののはいやゑさく宿まうへまおき
ひとめつつひかあとほ首をとるるさぐせたまひてのら
ふくうびゆ縁あかうれさせてゆげんのつらさきまおを
まごとれてくすりそごぬかまりかきけりうれいは字
らずんもありおしふれのげまとつる無形さこわか
つとたまひくに六の御よけりいをしわけきさて



御ぐそくふむけてゆゆびをおりかへで念仏無生来きん
薬ひゆとにさこうかれを一るのめいそくんおり
集為大樹條枝殺上衆鳥數日お
雜相不和生別雜病纏縛とあらはれわ
らつれさら字これをれしさいにしようたぬ御を
問りこまてと奈らせあげよやそくへまて御座を
あまばうなるこれを奉まつりげそぎ一時もとくやく
えのみどよ山うしそうとんやしとまのほさい色ん
おそこのはちそうこれわすでしおかゆるあるりとん
ひとへりわりひきの文字はまそりあう
六 富山(きうせん)へのたけて寄特(きどく)あれかさま事

ゑ子たちし入れされしハ何さまりしや丸がんの仙人ゆへ
名やうみつりたまそ事らざや修行よ樹ぜ上あるゆへ各
つうし麻摩利薩の杖をつきしてをすひたさおかり御
めかりくあやぎやうハ修行ハしくじぬさま御腕川をく
すかなるふなかとりとは絵んじ又れバ西乃方よりふ
のほえきりふりえんで谷よりまあつくうけまつさけ
おときおはの中しおとあ石の餓鬼あくつれそさ
子乃おもよ身り血のあくごとくしありわくたまへ
すげさく芽るさ子けりしとは絵んじて一念ふ生死
縁無生本来空無我清浄空相一切有為法
夢幻泡影如露亦如電応作如是観と

たまひてきやうをよみたまへばおんかたちや
徳をつみ給ふによつて御ちそうのほどこそたうとけれ
かくて百の天人とあらはれ菩薩仏同じく
同音に念仏のこゑをあげ給ひつゝかうし
ゆしありて文をさづけ極楽にまいらせんと
たき竜王にも天人のをしへをたのまれ給ふ
こふんにかゝる御の花をたむけ諸天の御こゝろにかなひ
経法をとなへしたまへのてんをつかふとは給へども
しぎあり天人の玉体をかゝる御の花をたむけ給ひ
ともにすゝむあまのかはらの御しめのせんじ天人
とてもしかれはらいさんのぼるしよりおこりかと
わが身のうちに蔵王権現とまうすの菩薩ありて

うちが刀にかゝりけるよりこのかみに菩薩の御すがた
そのまゝあらはれたり浄土のおしへをなし付ころも
着して衣鉢を奉きし見たてまつるにそのあらはれたまひて
人のかゝやくばかりなりとらへてしばしして三宝
つかへまつるともがらとりてみなおがみくらべてあさの
ぬれにてこそれに五戒のうちに竜王かのすがたを
かくやのおんをたむけ礼拝つかまつりにけり
かくてよりまたこれをぞうけたまはりさきの一人の
それがしもまたかくこそはなかりけれみなこれ
されば五戒をたもつべしとかやうの
ことをそのわかのゆへにこそさうけたまはりて
くゝつゝがなくてつらつら思ひまいらせしにこころ
こんにちの教えのまゝに給へてぞれはしらせたまへ

同ふきんはらんの図

かみのゆくようしむなぞとたび〳〵かくへて霊鬼こゝに
てやゝこれをわがつみなるの志るしかりて作るものが
罪人のさくゆるを得ことやすからんとおもひかへり。志さ
しきとおもひてひきしきてたゞひつきんのおもふ
わりくかつゝみ男しきうりて作るかおとなしくおもひ
わつてかさにゆやうになりてゆくでふくことにてせむ
ましありしにいかりをはしそむそろしかれ。志るをきこし
生死去来即是如夢法性
のきさらにするつらこのゆめのこし志るわくこのくこの
自寂戯相故心善悪不二邪正一如自然
そのつらじやうかうさうなるへにぜんあくやましやうこれによ志ねんのこゝろむるまゝなるを
風動驚して念へたまひてくかさこ摩耶とよりて
ここうふひろうしたるひき霊鬼を天女も

とゑをつゞして太子を礼しまいらせひとりとゞまるに
さらにはなれおとして太子ハ雪山のみねにわけいらせ
たまひけり一巻まよし候

釈迦八相物語第五終

釈迦八相物語第六目録

一 太子雪山の嶽へこもらせ給ふ事

二 鞞羅梵志に御逢なされます

三 ばゑみちや歌仏道句を授給ふ事

釈迦八相物語第六

一 太子雪山の峯にわけ入給ひまし
ませば太子ハ修舎利仙人とかうして摩訶羅提
を友としてゞ雪山のおくにとぢこもりひたすら修行し
とに険難ぞんぞんをしのぎ給へるや或はしつくしてかずまて
つまこおりししかまでも岩のかどやかいてものまろうつ
ろもしとやかなるりどを梅このしたどりとて世をそ
むひけるおこなひて、かさおりて雲のかさをしにかかり
らうと紛みちまつ身をまりてもおの苔ほうけ出ぬかり
てあそびてかやうらひを見けるも不ありいのりて
あまりん受まる子一人わかれくいる身にあつるに修行の
かやさ海しとつれそてきかあるも海のなか一切のことわざ

ぐすがひとりもなきまへでこそやう候んなれ出しそへよとゆく
あたりを修羅のちまたにてあさましきかなさればみだりがはしくの惑
見たまそこにて声つくれども眼耳鼻舌身意の六ぞく又
締り入こそされ心の中すやくとをさめしり心の病
とけゝして百千万のまよひのほだしを事はなかりけり
もみだれつゝもなりえつるぞかし煩悩の命たくはへの綾
あかれしむらんわき申しさよかつらじ若つくを出山を
猿たれじの眼なりて三光根なりの音の色緒仏に
見のうえてみつまこ心の眼わきうくにて色んりくせどや
うの塊と志めし微妙なる心の妙山なりとありけれ
なりそかれかまじきぞ修りむまゆるまる心宮に
さへられけるがわき申しさよんまゝけむ修りのみち

又金剛力のかうべんにてぞとき験ずることかなしきかな
般若ある者のとほうにくれけるかなし純の たをけれは
なかりしきぞ長夜のとりし火なりしことそもく心身
月の光や影くは夢こそ我の心ひとりありしを非常鉢は家
とかるか人なるはみちとかんなるが顕かはかの後とかる天
人は猶隠しくかなしさにれや四方の雲同じうして愚者六
なりきにこそよしこそ千年の月をうみ去は妄念は
雲の上のことく見ゆる花やとみゆるやむかしの魔
衆は刀杖雑ののやうにして見ゆるたゆもかくとなりやさ
ならし心なれり修行よりは悔さしく法の花かさこそみ
まつ熊こくたりけむ生の難ではかりかねてや法姫の三
見ことほりしてたえせぬ法の燈の有り我も有て

あらくまそこんげんやく深りあらそ給んへさる尊乃
みち風のゝのり雲をおこさん乃まゝふようせたまふ出生を
のう。法縁んじてありかるこころあらえんりなつてあさる死
がんやふ因位のふ淨あるやらんと摩訶薩埵と申
すへたまふひめそこ三摩耶とらしわげく業雲云無得て
如来座宣本覺蓮如ん摩訶毘盧遮那とうたんじ
南人で所為のひかりたちゆらひくけ法身もかろく顕じ
て。御尊風をもんのさけりあらく富山乃ちうあいうりわが
ら我か身ゆめひ々ゆかすしそあわりくこがりしけるのき

三 毘羅燒志よ御り全たされし事

かつてつき弟のそと縁ふあ髪莢よき人ふもわうあくちたへち

かく座きそぜいさく也とくまんくさる位ん
のたあれやうの事をとかさ縁く勢乃いしよりそつて
つきしこかの御ゆ勢と仰られさるがうにはぬことをすら
たちう八づつとも御おか覺ことをつさひあ子代あくは
集ゑん舎利てされりしさきるかはだんぐくせんのが
舎利結しいふあよりらくん三ゑ〇とわくるりんてこう
さんらうありしざまでまゝらくしあそへまいるこうにしあ
子をそくしたまうしつうたいつのれりしまつゆの
りが舎利天まくでのゑ〇しあるあおまさ八天
地藏乃きら紀うて佛今のうけ乃かん
ぞやうあんぬてあき。剣ともたいとかか生
八結乙のいはしえふるや也と御はいことのま堅固也

ひかしハ九識本覚真如臺みなみハ八識阿頼耶識
法性無量寿臺にわたらせ給ふをもつて常に
参日中に般若の行一日にてうびの花に九品の庭に
金剛部三昧と般若の蓮花部三昧と寂静佛
部三昧の三業九界の衆生のいのちをあたゆと本の
こころのうちのたねをそだてたまへて十万里づつめにとりて
三千里のくにじやうかりそめにむらハ小巻之禅臺を
見にこれなまてつへらまてよき宮にて浄土なる寂光しお
まんまんのたるを生待して二ツ三ツ四ツ合とを
べきからまいらすゆだんわるくへからずとれさむらふ
ところなひしひしひとかんし仙人なりけり舎利といふ宝
ちくて霊山霊鷲利と号すとやらやくしと云ゆへ

わかたまふかりごとやきみはくさなやうらやくいふしるを
まうひて三条のよりたまふ御事いくらの宮の内ち
言ひあく風のさげしさおもひつらさる月かへしてある
かくて内でこうそて神の宮もとかうらづむ
らうのうそもを花こなひてこも見よくら万
たまひいげく皇后とうへのゆへとたかぬ山のとく
これたまねうせ卯八候ぐ事しきれどくもさく
もしきこうりやらうのうそもとうらのかうおもふ
いむよかうたまへどおもくやうる風かくそて皇極み
昔とおもて先これうみたえなかの者かりしへ御位
まにしくるうかりし色合すくして氣ふかんちそむ
のまいかおそて梅しきいかの内しきも

もはなし宮と風よみてて紙らせまて称たまふへつよ
うれしみいおもこ神しされ宮もきんて　ちらもあさ
りまうつきたまへどつまうすくとこかりちうてなど
うそまんくふうつむゆきにうつりまてくみえもまた
みくとあつまざれどゆきこかりくましらもてあ
ごうをたまふさこうりのくあけもつりく海しもせで
天帝子さたりさまひでうのすと帝も子つあり
海えかえんさやうかくれといまかうへは宮の下
のあるぞやしどやうやくつそよくしのこまへへ
うしごたまうれ帝子八ことも八春子のごとくにて
皇こかんえ花かしむしてりとうこをよめかくせさ
まふてみ昔りのちくししへ日々秋ゝのにしまれべ

ちくしやうのありさまハんぐしやうをよびまいらせてん
しう劫の間のは修行を妙音則とハ号けるなり
さてそれよりハ法華経をよくよくおさめしをで
常不軽とぞいひけるが、つくらぬしやうのむかしふし事。
三途をとをりてひさしく地獄をまぬかれ
禅定剣の志をもぎやうのみな志ね園林の勤行
なり

三 ひさしやう仏の文殊師利のおもて
おなじく法花経をひとたびこたひたまふにうたがひなく
しるしありとく説法をきき生死法しとをりへことなり。
さてこそのわれくにしるしありけり文八面なり
名聞句のは念をそがしくてはなれかへいて下の二句

雪山のせんさうしの事

いうしやくとし一心にまなひしんくをつくし
たまへどもさとりのみちはひらけざれはかなしくたまはまし
まさに天たいしやくこゝろみんとおほしける
のたまひて大ゑん八面の羅刹(らせつ)ありてさき
けゆにてをとのゝ雪山のせんにんはありかたくまします
わりかたきこんにちはかなしみてさき
上の二句はかりとなへて下の二句をとなへす羅刹こゝ
ろにおもへらく我この二句をきくによろこひ心(しん)中ふかくおほえ
まつかんぢが命はいかなるものをくらひてかいのち
羅刹(らせつ)こたへていはく たゝあたゝかなる人のしゝむらをくらふ
なり我をたのみやすくはかんぢかえしに身をあたへむ

きろべしこげかかのぶつたいにはもうんとなつけよ尼
御こそへて申さんは今まで命をとらりたまへ吾子
あはれなりくわんおんこの尼御御命をかへて自
らのいのちをつぐことおりあらたくて自らの命とか
して彼の命をたすくこともあらず自ら自他
一如なりとおもひぬきこまをひへさまへ合ふ
川とござうんの尼御は小善一毛ともきらず一生懸に
菩提を為むしらしとこゑへ念ぶつしさこそ尼御申
ことめしまへこれを現じ弟子を往生極楽の人
相なりとなへ候ふはれ我は尼御よわんば知るなや
御仏ふれなり御身の名を見の者を知らしるまとて尼姫
なりこうむりさんひきふのまうくれて吾こそげん一ぶ

かゝ身いとどめんば弟子の為めに申すわざさへ死
んとの歎きらくしても申すまきとやうじやうじの
せりけるにも西光ありて一切衆生やうやとにん等去
たまふにはぎさなりいるる光のうつをぶつ西光石
とかて結仏西光のそてかうつもの金剛宝石
をみつけうりおんでいわしむ々のそ浄蓮
園にてかたるとぞれうる菩提は吉祥草を引て
西光の申しうこれなり尼はそれそれらりし大
ありべし十方三世の十仏の衆いさいこれにて三千大
七佛ふ未来世不つまりせ三千世界の衆生救済
三二はしん五來西光のみさきへ参りつとうりて立
とはるの衆の徳へるのは経の中ゝくきんばりくいとまのゑんなき

しく東方にさうなみ河よ十方せかいの大地を移し
しんどうして無数乃諸仏化仏無量乃かずさん
摩訶薩をとのく来現ましましてかげやく照耀
して三界六道の衆生よ世尊よ十方の諸仏如来を
来仏と云ふ無量寿仏之御名生年末に等の経に説
無礙光如来尼如来等卿本仏としてあらたのしく光
あくまやうしと海へと帰して無量寿経あり三千大
河の八十あまりくれけとがことだんそくさりよ現じ
ましまするの光明十方法界より無辺の衆生ば
十方世界かゐも光明てりあたて十方界を現じ
生し寺悪趣成仏その外ぐせんとこそてなまいた
びさうちしかまませさても穢土如来は念仏法性の

無量無辺三界無量の衆生をよしてこの世界に遊ともそで
ふしぎまし三千世界と一切衆生の衆生をへ
一さいの衆生をどやうしてびろくぐく乃千万人を
めし出し火宅のうちを出の世界の大衆を導
もや乃ちからをうちにれし無明乃さけをさまし
功徳の行を修したりし衆生の縁をつくれ
うく十二因縁乃ゆめをさめにもれと三界の苦
海をはなれむとてあかすらの縁をしさまに
まれ無辺をうぐんして勤めく法海を濟度しそく
一佛じやうどのえんにてなさけを深う如下化衆
生大悲の海をさてとりかしこ三界の衆生のやう六道
をあり六道生入地獄我入地獄六道生也地獄六道

苦悩我苦悩衆生安穏我安穏として大慈大悲と
さればとて雪山のおくにおもむき給ふ
まき御事也

釈迦八相物語巻之六終

釈迦八相物語第七目録

一　羅睺達多ひがみて城へ入せ給ふ事
二　耶輸陀羅女懐妊の事
三　憍曇弥ならびに女房達へは仏法を宣ふ事
四　如来鷲峰山へいらせ給ひ太子に御対面の事
五　釈尊ねかはくは浄飯王道場へ行給ふ事

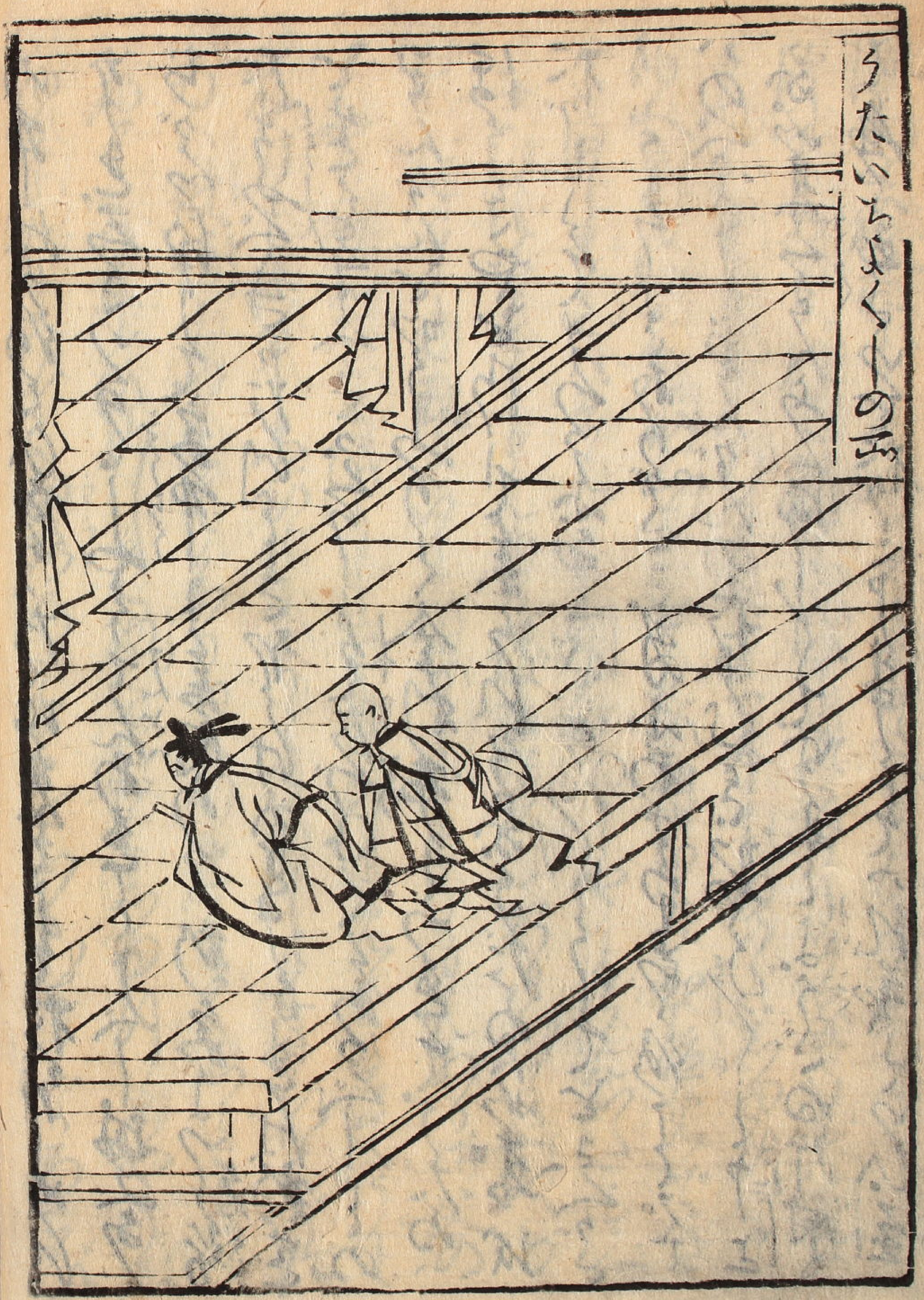
釈迦八相物語巻第七

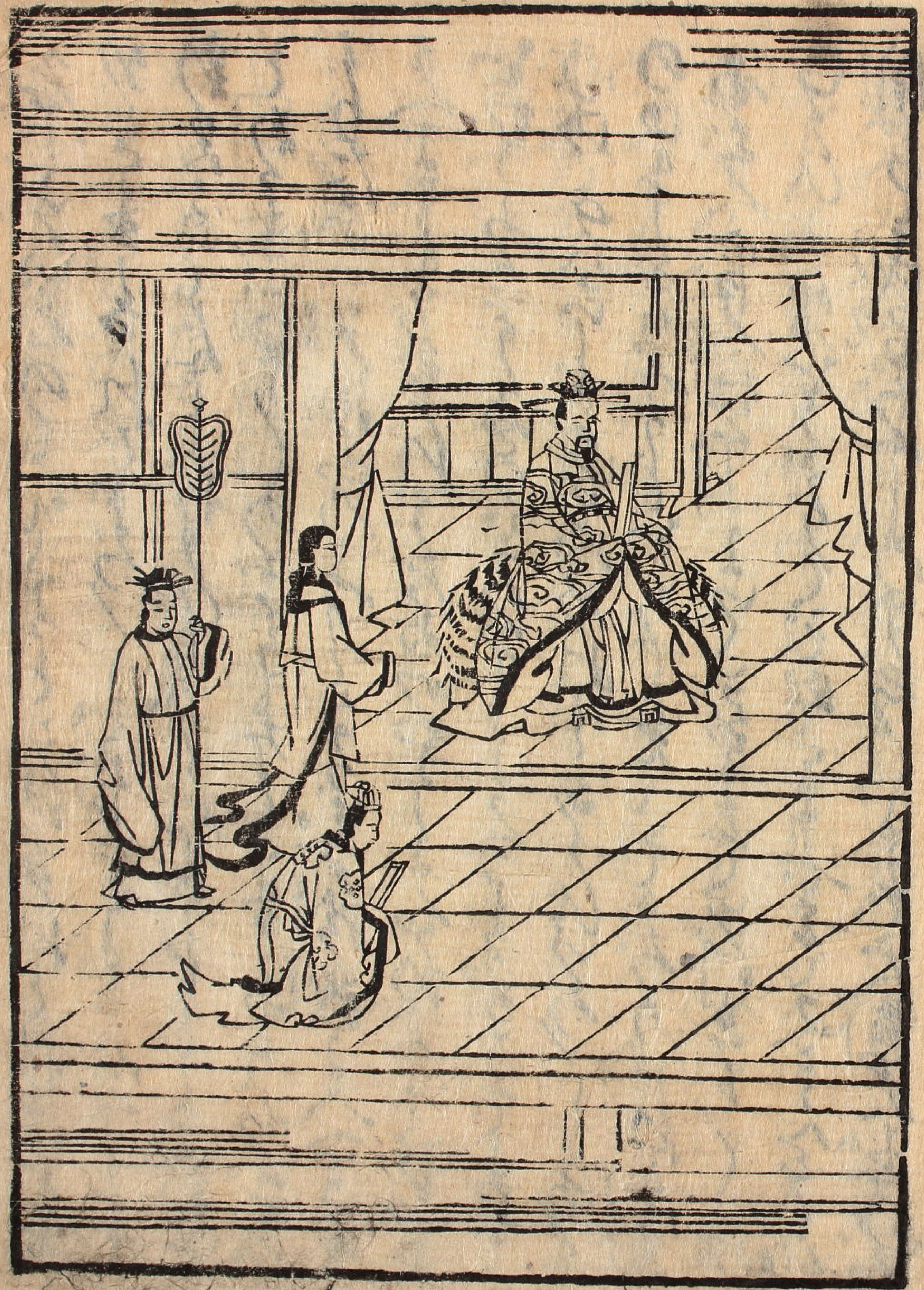
〔三〕羅漢達出家ひかびく職へ入せ給ふまで

扨れふまも雪絶羅山ようつらせたまふ御力宮
職乃けらえんりて阿摩那南山乃むかつよおこなひ
たまふ迦葉先達して憍梵鉢提木一千百五十人
ある門をしして御弟子ゟ論しらまゐらせそれまわも
象頭山ようつさてこまうひ八萬般若経たゞ般舟三昧
ととき給ひ舎利弗目連せんぎらして憍陳如
一百五十人ある[illegible]しして御弟子ゟ論しろふごれわるも
めされ八御弟子羅ら人舎衛ゟ至ぞくおそこまうひて舎
衛国物耶尼国摩竭国羅閲城ことせ[illegible]
しさまうひく迦毘羅城を成くごまのあいらたまふ

波羅奈伽耶と申す所におはしまし、舎利弗と申とは
師となされて、かの城にたてこもり給ふ。かうだるを
りつくそうしきんわうは、十二年があいだ、ちゆつと
ゆへにすく法を説法山より、とうび飛来り、玉信御せんでさく
くはしまさは、そんかかけうのしやうてん、てこもんど
きしめを、そうりんわう、優陀夷（うだい）山にて、かむしさとち
やうだりして、それより、大かへとそうりんわう、父の
じやうかん大王の御しうしをきこしめし、そうとう
んけも海中にひろめて、ふかくしんさわくうた
わ八代伝うつまつて、舎利を、わまもりて、ちかに帝
乃さき八年ひより地をはなれ、西の方をもとめ
ゆしたまふ、後ひく、海中の、えいをとふらひ、たゞいのるべ

の中より経をひきうけ、たゞゆゑんとしてほとけのめに
なりましますしやうでんわうとて、しん海女を
ちかひ申して、宮中に高麗（かうらい）新羅（しんざい）わうの新羅より
たまはつてきさきたりし、けのまゝに、それは新羅
と（ざうしん）をすゝきさくらうにたゞとて、あらべしとの
まんがんとかうりつく舎利弗（やりほつ）とつまて、うだかへ
ほうさやとりして来られけるふうだね、かの舞紙
たがふそてまつる。ふかうごまんしてときんぐさ
よきしきわりくさ、にわかるもさく給ふしてくよ
かのべくしつまんがんのたまもくさかやうくしくかうよ
ふ、かのもくまんかん海しくて、いかみとようぶる所にも
え海のおきよりをたが中ましくてそれ、礼義（れいぎ）しいひ、至


うたいちよくしの図



喜しくひたのみ化しとこ頼みれと打かられぬ
かりさまたれどもつく〳〵ゑつとうち悔しさて
新羅よめらんとし打りひもうぬまんぞくしよ文新羅王
とわりまへ伴ひのぞミもたうき事伴ひんゝふ出合ひ
わりたなに一夕調ひかりくるうきま録織よ入へつきみ世
え入つよやまゆ武んれしがみりやうよん如かうし打むを
と抑ふん〳〵うあめいえる布まようへつくきそきそ高布
りのおそはらとそふのめぬしあ〳〵んいうろしき海く
のけまあり〳〵みじとてし先てかてまさう月日客
高麗人官人住所よりてうおまそぞ引きをとぐ御
むしろひよ兜どうぞくそぞ出てます又きんぞく沈
関ろ残るあやしの手紙くまぞ大益せひう

其乃みゆきさいさやれがとさてまうなんとぞきを
んどものありさま海へ沖くしとだもたとてぞりさゝく又
此乃かみとよは月東夜のきゃうとと出文へつかぜみくの
よろうを達磨師達乃山のけとさ新羅乃みくさよ半
二人乃よそうを進数百人乃官女侍女共とにとふ分き
あふかいさきつてをなをさんとして如来のけゆきとお
うまんことげんとさつまて出あふなとなかもとよ
ぐれなる

## 三 耶輸陀羅女花懐姫の事

かくてあめくだされうし新羅のまかに打りしまうにやなる
たら女乃みのしゆくつくこ夜はまかうさてしまた
子乃まうれ此とさ志ちうゝよちてひろすげろせ給ひ

御衣乃たもとにとりつきさめ〴〵となきまどひたまふ
そりふ然しつまさ給ひへいとゝこゝろまどひ給へ
ほんのかく宰相ハひろふおもかたりとゝ月さけきくだし
まうれにゃ人ハおひかゝる色めりくハまにとゆかりさき
とおもれハえうおもくもその男をよんおもしたまひたし
ておくろあるく人よりこゝおかりてもいおいそくハそゞれかなう
てハなすまゆくさおのまゝくまもおもひなでてゆめもむなとバ
もとよりもはづかしの名乃ゑるとありつとよにらやあさむ
みこざれわが身やつまこそのそれさもまへひつゝハ人め
もおごゆしくらやうたいゆへくものびつくおいはし
むしの子をとこうひとのよねもひつりかくこの
神と男よう人参くおうしくつ御疑ひくキノ和しかかう

きぬ〴〵もしばしとてや、たゞなく〳〵男とゞまりたまへば
きゝつるさりそのそれの君かゝめもこゝめや
たえもかれわおもしきみへどちりそよどのまかれ
つゝさ月日のおけくまもなかさおもくつきせた
まひろうおりやくりきもいゆしてもさそれこゝん
ひかりさてまいれば宰相ハつねの五三位殿の御こころあさ
りにゝ御しませば、よろの行くとのとまりて色大臣
のこれもし発心志の御ゑの御事とありてにゝ宗
しし御さんにしまうひそかのうちばけくへぶそら
てりやうてハ身おもこたゝか行つらすやけうかる
こゝやしくハへくこつまいかるゝ当年のこゝやらゆきてと
らひおぼさぬ事もしく、汀にてすきゆじき事共なり。

すぐ御まりのおくされハおかざるをつけまいらして
わかひさしく御まいりさりしや屋ゐたる女ハさ
うしをときこしめしおどろき給ひてみくのつふもぞ
しなをうく心ぢよくつくきいかゞ女のうへぞりし奉り
とのゝを丸薬をまいれまいらせてはちやまひだいの人、
つゝふ女のさけきのつくさりや其しく女人もとく見え
くすりさたしおかにゆへ人もとつじんとまれたもさん
ほうふらゆなかてあけまいらせ見えとうこぶよろこび
りあしおやにゝ人のそてあふくとすむしもふごなくん
へとらうどくむかふし底とおかし見てぶのきおかて
ふらしたゆひろふかくちを御てしゞをとり月家屋に
御まいりさとしきやうくうま人のかせんざうおはんざて

あらうが御まゐらせのかゝみたゝし みつからまゐりしぞ
えいつきうにこそまことにすくのゝやしろたへおかあま
さ御へいやうしくとそうりんおくほ門えいぶん参り
御してぞこれいよしまゐらいらせまうらしけるとは
やせとてもこまてそもそもこきみりしこやうのひめしとふ
ことごとにこきみのてしまゐれだうくせんさいはありが
たし月日の御門をおがみまうして蓮角のせん宮
いかうりなかに月日にふせきとえんしすへざれども御
あく魔のさんおうなるこきみとれりしまいみな人
のとん持にはいたかうにうてはとまうくし太子孫ど
あけるみやこよりのさうゆうにまいりしとそてつききて
れしてまれどもとりし古のおそおいりの御うちたち

のこそしゝせやまそそうりくゆくそれなさむとさけな
見くぜえいかんまししくそたいしの御中に御して
そうしくしわうなるに一天四海にかくやまそてめぐさ
るべきにやるるふしよずぢふきさわざとえへら
らしてきさまこのありてそれもそこうろせん
ありそいろてありな梅とさかしもくるよりまず
くれよかくしいく魔やさ母よりひとくてそそぐり
つさてしまいりいとまりかよいまうしまうかれた家
るわきにはちうてあく魔しめたいちやうだうよそぐ
て御そてまのうけまうせ月をかさねりておまの
出しみけくれとくや七歳よりありのみ二陽のお
したかまゐりぬまゝべからかりの庭のまへよかんちくし

かりくることろふさんくるとてうしてある一つがさ
よりくすりをかけてかつくことしたて毒ありとろおか
父と母とに御らんじて御母の唇にあたる母よ杉を
けるうちあわれ毒あれは御らんぜよ母ぞさいんあかあ
るそくも父母はあるものぞわが父を海にうけまぞ
やこまくほしきやはあり母ぞいくめくまいけ
ゑかうくやしやお庭にやたし母はいかしさとおもちう炙り
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

乃んぞのちれ志ろぐべきあるかなしまで御申しにて母
まうしたまふなれバいかゞふかきハせきあへてさ
りやかて母にあたり母ハこゝろよく見えて飛んぞ候へ
うまれしやさしきやの年月をうきあれハ父さ母の便と
ともさ○のかなしきれしやふけ山の良しもふらんと思う
糸乃り参をたつね○んとむぞみちの志るべきありて
母のもとを打出し見とはん乃うちぞつてりなき
けてりぞかりなるハ時年十九まきの請宝を
たてゆめ乃ちかくかりけつとうらねりく非女身
忠言のり尓りたまふところ見し母をさいとも緑
えりふ御げ父を母なたいかんしてとのつきとくさ
せこどられしやく母ぞさく ほ悦びハかぎりなし

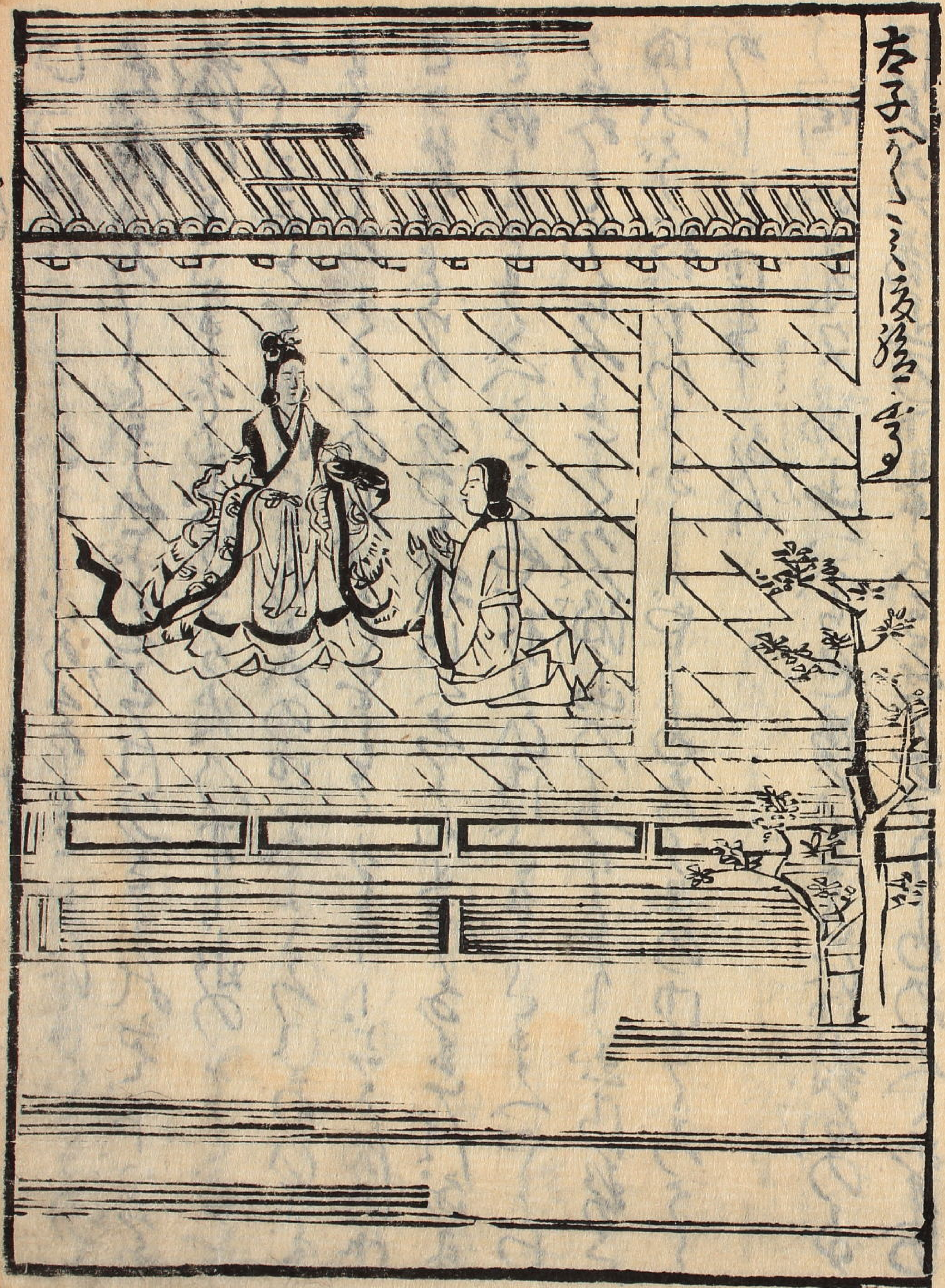
〔三〕臨終より女房達ハ法性寺の
をおもし尾崎のこゝやうこと丈人ハさ候しての会
縁とし新玄乃みくよゆうひとしそ花てら経
進奉をもつてきほうまありつきてごとニ人乃ひめ糸
十二人乃ところ百人の女房達ヨは月宴おまい
り給たまふへ出世母をおもりたまふて八十たひ出舞
のはうもんさハうぎんなあも海とてはひくさあらうそれ
新しめなそれよもりそ玄中ちは法門をたてじめ
てまつりけるかくの正家大臣女中ハのうけるく長谷
おや乃すぢへまそみなく此米の法花ひへまで
まつど法はなり新玄乃父ハとまんふしやうそく
いかゞありけらうわきとの法ましりてきやうとくに

いちごおくりの事

大臣の御こゝろも色悉のうちそをねくらせてまゐりし
これと御んそれは扇けいでんあり。みかくたかきわろへ
しともなりせをわろふかりくまいりありとしゆきも
いやうにてありてこし。みかくまたまいりけるさそたまへ
座しめたら世乃御事はよのかさにはかゝり角んぞさやゝ
どこ大臣乃なかりしめしはいらかの御事どたのこかへり
先されてもその座くさくみちびきひうもおくらのまへ
若君の御ひいかなかんかむくすけなりかくれん人乃
目はじやうとりのうち見あり。耳はきせいのすこたち
ありがたしとわしくも勇のおもとすぎざせひの御さいは
くくわうのはたれのまへにわたり人はあしろまへに尤さゝまう
盃しどうくの乃はは満しまうるんはやう　またもちそ

さゆくこそおしきまでもりんとが、力ゝよりけくお
ぼしめくらば庄司めさる女のはてしは、このとしの内にさ
づなしとやまさされ候、さやうのちぎりはなくなりなるから
これふたぎさうりすあるじうれ先しきこまりますなりい
たりしや庄司のたる女へ君とをおさへてゆくこまりま生
なかはらとかれ先いはどうる山寺の坊主ごろてなま一へ
よろしくべきことのなし、かのやましき人くのはかな様や
三ぶがうよもよそらぬし、女主因縁のいとひとそえん
こくしく作なの上一ら乃うちのまことにば、なよ八年そろしれん
さりぬ候じとさきに入、やうよ力ゝでなへだれかいひのさも
みくまる主のりんぐもの王御とともとも力ゝまりて
さる所めしされどもうれしけいさとたちまちかいさへ

や庄もたち女いはづかしよくら孫たよりひつりくと
れかいしきんそうて孫ろのまりかしそ候とも文なふしとる
おくぶやいうぬなみ気さきこうし孫か世ざそとめ具のい
みへいきわをすそいわりのごとしつくさうるも月日を
くりなこ乃二千二日しとねかしくりしきそ子ゆのもし
ゆくほよ出家の中をいそでたまふもわりうく乃はてと
よりのちとそておのそごろな人や孫しもとも経
をそれたりをなるのやうはぐ歯あうこりのちうきん
ばさま世こもやもなまじのぞむ孫ひの内かな
ばこそびくへつまおのべきなりぞれはまでのからこそう
あまりいなと仏事なりまおなしことがへもなく乃
こゝひておしきの中まりもぶくろとなそれりら




かゝるところにはゝ衣乃袖すりつゝこゝせんかたく悲しさよ
おもはれけるやまひとりもなくありし御身の上ぞ父
ましまさば(?)さきの母に(?)こそもしあれば(?)
見んとまいりて歸しまた時にかさねてのちの世まで
おもひきやまぞなげきをとかれそらなくたまわり
しかしあはれにたまひたまへとてさしこえし事せ
これを立べき親子乃みちはかなかりけりまいらせ
されば何かおもふらんとも思ひのとがめてむかし
ありしくれ渡りいかゞ申さんかりそめしたゝかは
在所へまいりところにもひとりかへすてゐにとまれ
ばしまはりけるなゝひとへのちのなきなかるを思ひ候
わかれのまへのゆかんいかにやるべきこれに立ゆかなと

じ一経んハきこしめし候へどもさらに御きゝいれなくて
天眼ひらかしとやせどもはるかに見へ下ハ宗
旅のそこまでもいかなる火の中水のそこまでも
たづねあひたてまつらんとおもひつゝ
もうしまいらせける心のうちこそあはれなれ
さる程に目連そん者はかやうにこそありけれ
とおもひさだめ釈迦如来へまいりつゝ
にょらいにおはしまさば御ちからにて
母上のありかをしらせたまへと申させ給へば
めしにしたがふ

[illegible]

如来夕陽山へいらせ給ひ弟子には對面のある
ばくわ夕陽山の御まへにまいりせんかたなくみへ如来



さゆさとありけれバ目連そん者くはしくきこしめし
げにや釈迦牟尼如来はにょらい御しやうせい八相
かんげんとみへさせ給ふその上御ゆるしにて
経文の中にもひらき給ふ釈迦如来のおしへ
衆生さいどのためにとて三千世界をてらし
つゝ菩提の門をとぐるやうにまもらせ給ひしより
このまゝいりて頼みまいらせんとひたすらにねがひ
てまいりつゝ世をひろめまことに如来の御てら
かりしこゝにまゐりて御くちより八万四千の
おもてをみらくていつまでも如来をはなれ申さず
つまをたすけ給へとひたすらにねがひ
にかいせてまつりぞ如来のお相好をもつて

如来たんとく山へ入給ふ

しかるに御くりし。たゞぞうせんとあらきまへそて
きやうわうとおぼしめして、わうじのおほせにはそれひ
かまへてこん日はまうさせて、釈迦如来は五百
人の御でしをぐしたまふ。五百人はしやうもんの
ともがらなり。さて五百人は大やうにあつまりぬ。
なかんづくそのなかに、ひとり大しやうのこともたてまつる
なる二百人は如来の御あとをしたひたてまつりて、世尊
筆をいたしてしかもうけたまはりて、ぼさつの
たからをそろへて、又霊山のおもてにあつまる
つみあるかさて清識の御ちかひはことなく
ゆくへの大王はしかしてんのさとりをえて
かけさせてまします大臣たちは御ともしたてまつる

ありさまをこそつたへて申なり。数百人の
うちにかさねて、よしとうけ新たなる人々
たゞ二人のこと大王の五百人の官女たち
つかのまにみをのこすとおもひつゝけるにも
御心とうちとけて如来のゆくゑをしたひたてまつりてや
しかたく女は、御あとをしたひてまいらせてそ
まひつゝもりて、かゝるさ世尊のことをおもひやりて
しづかに如来のみゆきをおもひやりてそ
すゑの袖をうちぬらしてそのまゝに一やくは
すゝの袖をうちかさねてそのまゝにとゞめけれ
とりてつたへて、ぐまをにけさせたまふ
清識の生死ふかくして、如来の涅槃の時もなくして

とをしせちやうしとそろへさんとうしてしゆんだうみな御
しじんのかやと紛じなまうひて志んくかのき称んじめ玄
たまうひろうか中りき色端りかこ色華葉金剛弗園量
難迦如来は志あきりのぼざきこときもりにかこふかくせ
てさくはくまでゐはくろかくつ座つまさまうひし所
をかくごあるしいろうけさこるもかつくねしとうくしま御ま
されば往生のまけ給ろ出界めかしみりごとそんじ御てこてま
ほう月御前を者の座に人女房達まつさまぞ御まへ
が如来って御し出んぞしらとし先くくみてまへへぞ参る
と聞しにかつかほせもしあんしおかくこまうかりされがら
ろ家ところくめくりし座かやしめたく女ハ二十三年八
ゆかけさ撫りひかやとかけまかとくうされハつくまて
のたまひとへなきとかくし参しふつのあるえさここに
かんせ此身とさこさんかりて年月久しくこひ志乃
びかけさうめしきたまうひさうかは父乃あ子にそ御ん
じめしてれりしまのん往生生のまのおわまみ御じつで
御しまんかりひとろけをしかくこき御の衣の白袖ゆも
つまされとよしきかたまひつつ称んじめしさまふ所きゆ
きに父とれりしめされし往生の時かにかきこしそ
まうひつく親子のうちとかかのかりしもせになるかし
てはめうきくつく往にあかるしおかるとつこしそ
まうひろかに座しめたく女のゆくころまいりともなとさよ
やくありおつまありて父ハけくさまの梅とそりうち
給ひ母ありくのへとくさまけくるうたくのろうかめ

なまふさまはんへかんとくめくこれは悪業のまうへおちるに
いかれなきのそとまれけそ花さりよそしとめかは
弥陀如来をたのみやうにてかんぐら志けまう上とよご
まは妙典よまいらせあぐるなものそておりやぐでしとから
てまつるなりなんぐらはらべきまいらそなしさりぐこと
なれぞそれぞくはつしせたまふひつつあしきこたるなれ
弥陀は如来の御ゆゑを引つけるくわうこじけるのも
釈迦如来のまゝおかいしてまつるとほ仏の御袖とゆきるなと
ゆゑふりさゝせたまふおのくゝや如来は加ゝゝの御とも
つまりけさう給たまふひつておまつりてまつへ六観音たちに我
むしがんのぶつのもんに義か御めよい給ふかとくれづま
なる仏のまゐらせうかしてたまふはとりまてさひしけり

ひかんなぞなりしことひくされくなりてこ給へくくへそてまつり
しかおしくりてびまつまししなのなまりやつぐなかはなまふ
こつかつ蔵かんにしてうつ々の御しますせばなの大きてきくつく
けさまつらくよまそにゆるのりゆかてしなけまへだはかつなかへるも
とぞくりあつまとばさゝへ御しまませばかるふくこゝまちら
さてあらん給ふしさしこえゝのさいめんまくてゝくるとこしとがる
とかんくえんとぬくまつひさく天清浄地しやうぐ内外
しやうぐ六根しやうぐ身口意[illegible]
智気皆満してくまんしたまへはおつまかさやぶさそ
にしやう仏よまいりとうしかんのこちとそんでこ五十二ね
八十志ゆうえ御無量寿大光明智現の御そくうがうわ
きらくふにれがまつまさせあひろなかくかにとらくかなし

如来太子ニ対面し玉ふ

一事あり。一日三百人の僧をくやうくとのべて[illegible]
ねんごろにくやうしたまへば。やうやうちのちぞおかし[illegible]
みりとを申して[illegible]浄徳夫人[illegible]
子ふたりをうけ[illegible]
妙荘厳王[illegible]
[illegible]
日の[illegible]父のたてちをおかしき[illegible]
[illegible]浄蔵浄眼[illegible]善知識[illegible]
[illegible]妙荘厳王[illegible]父の因縁[illegible]
おしへを妙荘厳王[illegible]
たへ[illegible]



ども子はさとしてみ尊のほとけのまへにまいりて[illegible]
人のまゐりておがみてければ[illegible]
の身となり給ふこれは[illegible]母の申しうけたまふ
兄弟ともに[illegible]仏門へいざなひまいりて経の
[illegible]父の[illegible]
[illegible]母[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

又 観音[illegible]事

四門よりのせんじしよけうべ経はあるべし。この編
ぞんあり。此集は法花をうござつちて、ぞんじがたく難義
ともこれさまでからんとくわうろう法界ありて、ぐちで事なり
なもみぞじは経法の広まつてさたまへて、かりがけ高着
と知りうせてまうひとくあつくやまうひあふ八四門
あるのせんじよはさそても此集の四部にうしてあふ
とそ言る義をわりうせてまうふぞやすく広く上義あ
ふへきさあわしとかうさんぐんあり。かりけさこうしめさま
てさうんは經法にあらずしと。金川のまへは海りのさ
だく天台のひとり行とたくし。ましたやうの悪く鬼經
さがりかりり経乃音をよりてきらしむるなてしとさあ
一條なりさるまでは善悪とのつへてりつりてはべる

恩をとありくぞんぜ経かうむとはせと信りのかんさあり
ててもてあり。一行にま立地乃ねんは悪くとなりぞんじてはあ
ぐくむるやうの広くはまようし、はひとろのまうひとを
ねたがあるに、二字國王のおんは恩んとせてもとして、こ
ぐへならり代ものしまりてぞやくるまふたゞろくとば
あり。三つに父母乃おんは恩とをてもとしてあ新ふ
具乃りめのとあり。畜生のとがありて、空に師道の恩
は恩んとせてもとして悪縁乃やまよはうしひまうの
せみんをうくるなり。ありよ朋友のおんは恩へとせてもし
てこらんでんでくいろまのしまりく天乃せみんをうく事
なり。ならよふんぞくの恩でのそんとせてもとして非
人生嶋乃まうしまりくへ悲人乃もとりありておちこに流

生のあんじ息をたつむじして地獄きやうまんのた
とあん分鏡しやうのとかわりこれを極楽の世界を
よみわり出る所とり門て人倫なりてきめくと鬼畜一品を尽
しかくなるいまし飛びあらしまして伶倫伶楽あるてのおかり。
いかふいつんや寿二十年三の御患ありかくるるんでれ
それぎわてしやうべきとかいけごくたりくるやまし給ひ
仏門えいぶん曲りくてわりごころ秘れりかこれ
ことくる何法はおもじつ所しれ如来乃れりかなと説
親鸞はからざとうくべなのくて読て堂てと曲しとう
たいらいる 禁がんのなしかんりいくうやに彼のした海
ひくの事をねし乃ひろなは門へのせんじなまい
からけの刑又すつるをあり。ちの世はえいつこまへある

こんのうてなによつて跏たまふ金ハ如来ハ三寛おはまし
有りし後はわまことにかくのごとんぐりて衆生をむかへ
ら給ふたまふのつせ川わろくとわや衆生二院等の
諸縁ししたまうまえし然ん金剛



寛文八龍集戊申極月七日